



「これ、なんだ?」「なんだ、これ?」「どうやってみようかな?」「こうしたらどうなる?」 ~保育者が遊び方を限定しないわけ~

11月12日(火)、1歳児の子どもたちが遊ぶ様子を見学してきました。戸外遊びは絶好の秋日和でした。園庭には、園庭にある木の落ち葉では足らずに、近くの公園や道路からも集められ、いろいろな形状や色の落ち葉が入り混じる『落ち葉じゅうたん』がありました。『落ち葉じゅうたん』の中をよく見ると、どんぐりやまつぼっくりも入っていました。また、遮光ネットのすき間を利用して、園庭にはないススキが挿してあり、『秋を感じられる環境』



が工夫されていることがわかりました。もちろん、砂場遊びやコンビカー、滑り台など、普段から遊んでいる遊びも楽しめるように準備されていました。

園庭に出てきた子どもたちは、自分のしたい遊びに一目散で走っていったり、目に入ったものを触ったりして、思い思いに遊ぶ姿がありました。

『落ち葉じゅうたん』では、落ち葉を踏むと音が鳴ることに気づいたり、落ち葉をお皿に乗せて「はい、どうぞ」と渡したりして遊ぶ姿がありました。すると、A児が、茎のある大きな葉っぱをもち、「おっ!」と声を出しました。また、木の枝を手に取り、砂地面や土面に書けることを楽しんでいました。すると次は、滑り台に書きに行く様子がありました。『何かを書く』ではなく『書くという行為を楽しむ姿』のように感じました。A児は滑り台に何かを書くことに夢中になっていました。A児の提げているカバンに入っていた落ち葉が落ちていたことに気づいたB児が、持っていたススキで掃く姿がありました。そんな二人の姿を見て、保育者は「掃除しているのね～」と行為を言語化して伝え、B児は「そうじ!」と嬉しそうに言っていました。



その言葉にA児はB児のもっているススキを見て、また、「おっ!」と声を出したのです。「あそこにあるよ」と声をかけられ、ススキを手にしたA児は、ススキの穂ではなく、棒(茎)に興味を示していました。振り回したり、挿したり抜いたりすることを楽しんでいました。

A児の2度の「おっ!」は、「大きな葉っぱ」「ススキがフワフワだ!」「フワフワで掃ける」ではなく、「葉っぱに棒(茎)が付いている!」「フワフワに棒(茎)が付いてる!」の発見の声であったのではないかと感じました。

保育者は、「こんな環境を整えると、子どもたちはどう遊ぶのだろうか?どんな遊び方をするのかな?」と子どもたちの姿を想像しながら、ワクワクして環境を整えます。安全面を考慮すると、遊び方を一定決める必要がある時もありますが、それも子どもの遊び方や姿を見てから考えることが大事になります。遊ぶ前、子どもが興味をもつ前から、「この遊びはこうやって遊ぶものです!」「その玩具はこう使います」と遊び方を先に教え込み、言われた通りに遊ぶだけでは、子どもの主体性は育ちません。また、文部科学省が標語にしている『遊びは学び 学びは遊び “やってみたいが学びの芽”』であるように、遊びを通して、子どもたちの「これなんだ?」「どうやってみようかな?」「こうしたらどうかな?」など、興味をもったり、遊び方を考えたりすることこそが『学びの芽』であり、『そだちのねっこ』であると思っています。

1歳児の子どもが発達段階を踏まえて、やっていることを言語化して、発語に促していくことも大事な保育者の

役割です。また、子どものやっていることを真似て、一緒に遊びながら、子どもが何を面白いと感じているのか、何を考えているのかを探ることも大事になります。

保育者が遊び方を限定しないのは、子どもの姿や声に耳を傾け、“やってみたい気持ち”や“気づきからの興味”に寄り添った保育者のかかわりの中に、『子どもの主体性を育むこと』が含まれているからです。

今回のエピソードを、【幼児期の終わりまでに育ってほしい姿】に関連させてみると、『健康な心と体』『自立心』『自然との関わり・生命尊重』につながる芽生えがありました。

